

第6章 魂の旅

トンコロンは、マーパンデ（大シャーマン）が人びとのサートウック（魂）をサンガ（祖先霊たち）のもとに連れて行き、最後にサートウックを人びとの身体に戻す、そのような旅の過程だった。それはマーパンデの言葉をたよりに、トンコロンに参加する人びとが自らの想像力を駆使し、魂の旅に出掛け、そして帰還する過程でもある。では、そのマーパンデが描き出し、トンコロンに参加する人びとが聴き入り、想像を広げる世界とは、どのようなものなのだろうか。

ここでは、一晩中続くサートウックの旅、つまり、マーパンデと人びとの想像の行き先を、トンコロンの際の筆者の記録と、その後トンコロンに詳しい数人から聞き取りした解説をもとに辿っていく¹。

6-1. キムから天上へ

マーパンデは、一度若者に持ち去られた自分の妻であるリン（太鼓）を再び手にして叩き始める。そして、うねるようなリズムで文言を詠唱しながら、あちこちに散らばっている人びとの魂を集め、ハルディン・タギディン（harudij tagidij P.）を呼び寄せ、そこに乗せる。ハルディン・タギディンは魂を乗せて運ぶ船のようなものであり、人によっては車のようなものだという。

マーパンデは、前回おこなわれたトンコロン以降に亡くなった人たちのリイ（霊）たちも呼ぶ。そして「貴方はこれ以上私たちと一緒に地上の世界（エレン）にいるわけにはいかないから、これから天上の世界に行こう」と誘っていく。

魂を引き連れて、一番にランディンシミ・ドガンデウ（raṅdij simi dogam deu P. cf. raṅ C. 土地, dij C. 神, simi C. 故郷, simi.dij C. 崖、崖の霊, dokam C. 決まった仕事 debi N. 女神）へと向かう。これは、M村の中心に祀られる地神で、年に一度それに対する村祭がおこなわれる²。

神への拝礼がすむと、M村が位置する山の尾根上にあるソラダウ（sohra dau P.）という土地へ進む。村の最北の畑であるこの場所は、村人たちの始祖ジェレラン（jereraṅ P.）以前にいた16（sohra. N）人兄弟のかつての居住地である。そこには今でも当時使われていた井戸が残っている。

ついでレカバン（lekəbaṅ P.）という丘を越え、チタラムバリ（citəram bari P.）に到着する。チタラムバリはパンデの太鼓に皮を張るときそれを留める紐（クラット krat P.）の素材がとれる場所である。ここで土地の名前、木の名前、石の名前を言うてはいけない。万一、うっかりと言うようなことがあれば、あたりは急に風雲に覆われ、暗くなり雨が降る。そしてジャア（トラ）が出る。

いくつかの山々を越え³パンデは天上の世界（laṅ.ka C.）へ向かって飛翔する。その途中、山々のひとつストウン（suntun P.）の先にバビ（bhābī N. 未来、運命）がいる。バビは、人が生まれたときに、その人が将来、金持ちになるのか、それとも貧乏人になるのか、パンデか、バイダール（bahidār N. 文官の1）か、ラタ（lāṭo N.

口のきけない、愚鈍な) なのか、トゥーロ (tūlo N. 偉大な) なのか、そしてどれほど生きられるのか等々、様々な人の運命を額に書き込む。パンデは、その運命を変えることはできないが、バビと話してその人を待ち受ける運命的な出来事の時期を遅らせることはできる。

飛翔を続け、やがて天上の世界に入っていくと、人間が普段食べているヤマノイモ (brangoy? P.) のリイが「地上で私たちを食べたな」とマーパンデに文句を言い、進路を阻もうとする。「道を空けてくれ。そうしないと棒で打つぞ。地上の人の魂をつれて天上に行かねばならないのだ」とパンデが言うと、ヤマノイモはそれにしたがう。だが、さらに昇っていくと今度は茅 (オン ?on C.) が止めに来る。マーパンデは、茅にも同じように言い、道を空けさせる。

その他にキングコブラの卵であるマイルカアング・シプルカアング (mairu ka anda sipru ka anda P. cf. ru : ヘビ, aṅḍā N. : 卵)、シャア (シカ) の神マーラン、続いてジャア的一种ラワジャア (rawa ja? P. cf. raw C. 過剰, 夥しい) がマーパンデ一行を続々と止めにくる。そしてンゴルバン・トプルバンという石 (ṅolu? baṅ toplu? baṅ P.) や木 (siṅ C.) も姿を現す。

それらを抜けて行くと、やがてヨーランティ・ドーランティという川 (yoran tih doran tih P. cf. yo- C. 目指す, do- C. 指し示す, tih P. 水) が見えてくる。そこで前回のトンコロンの降に死んだ人のリイに沐浴させる。この沐浴により、祖先のリイたちに新しく死んだ人のリイが受け入れてもらえるようになる。新しいリイの沐浴のあいだ、その身内のサートウックをマーパンデの指のあいだ、歯の隙間、脇の下に隠しておく。こうすれば生きた人のサートウックは祖先のリイたちの世界に連れて行かれずにすむ。準備が整ったら祖先のリイたちを呼ぶ。そして、その祖先のリイたちが沐浴を終えた新しいリイを連れて行く。亡くなった人のリイは、娘や孫たちのサートウックに送られ、祖先のリイたちのもとへ旅立って行った。

川の近くでサウトオ・カミトオ (sau to? kami to? P. cf. sāhu N. 商店主, kāmī N. 鍛冶屋, to? C. 舅) に出会う。このサウトオ・カミトオは、鉄を鍛えて矢尻を作り、先祖はそれで狩りをした。狩ったシャアの皮を剥いで敷くとそれは大地になった。赤い肉は赤い土に、白い肉 (脂肪) は白い土になった。骨はマレエチャンダ・ブレエチャンダ (巨大な岩に宿る神でユクドゥン・ラジャの物語にも登場する) に、角はシミになった。マーパンデは、相変わらず鉄を鍛えているかと問いかける。サウトオ・カミトオは何をしているのかと問い返してくる。パンデは、私の仲間のサートウックを天上や地下の世界に連れて行くんだと答え、先に進む。このサウトオ・カミトオにはトンコロンの供儀で、ジャールという葉に包んだトウモロコシのアム (ご飯) とブタのスネ肉を送る。

先に進んでいくと、ようやく天上の世界の頂上ボーロン (bhoron P.) に到着する。そしてそのすぐ横のビスアウニ (bisaunī N. 少時休憩の場所) で休憩する。

その脇にはブルデウアイ・ブルデウトオ (bhuldeu ?ay bhuldeu to? P. cf. bhu- C. 退く, del C. 陽が沈む場所, ?ay C. 姑) がいる。彼らは、マーパンデに祝福 (乳) を与える。そして、マーパンデは、ついに月や星の世界にまで到達する。そこで「月よ、星よ私も貴方たちについて (西の空へ) 行きます」と言い、天上のカット (kut P. cf. kat- C. 段を上る) から地上に降りて行く。

6-2. 地上から地下の下部世界へ

地上に戻ってくるとトコン、トコンと木を伐る音がある。トコンアイ・トコントオ (tokkon ʔay tokkon toʔ P. 木を伐る超自然的存在) が斧で木を倒そうとしている。マーパンデ (大シャーマン) は訊く。「私の仲間の魂を知らないか、どうかしていないか」。「知らない」と素っ気なく答える2人。それに怒ったマーパンデは斧を飛ばしてしまい、トコンアイ・トコントオは困り果てる。しばらく様子を見て、「何も悪さはしていないさそうだと、マーパンデは斧を取りに行き、返してやる。

さらに降りていくと道の情景 (リヤムサリ lyam sali P.)⁴が見えてくる。低地のカラシ・チョウラシ (ka lasi cow lasi P. チトワンと呼ばれる低地に対する儀礼的な異称 cf. cəw.ʔalʔ C. 耕地) には、水田 (yərsari P.) や森 (nəkhən ro P.) が広がり、眼下でタルーの人びとが田植えをしているのが見える。ネワールの商人は焼物の水ツボを担いでいる。家に彩色を施しているタルーもいる。

そこから、王と王妃が座っている丘 (raja pa nyao syaluŋ rani pa nyao syaluŋ P. cf. rājā N. 王, nya- C. 座る, rānī N. 王妃, sya.luŋ C. 丘) を通過する。スイギユウとウシ (haricəndə syaʔ kəkək syaʔ P.) がゆったりと歩いているのが見える。

その先には、人を痩せさせる力を持つニヤムトンガミ (nyam toŋ gəmi P. cf. nyam toŋ C. 陽の光, gəm- C. 保持する)、ついで、人を疲れさせ息を切らせるリパン (li pan P. cf. liʔ C. 重い, pan C. 生息地) の場所に到着する。

さらに進んでいったところにガマルバン (gamal ban P. cf. gam C. 熱心に, al C. 行く) がある。これは大きな石で、マーパンデがそれを叩くと、地下の世界に進んでいくための力が与えられ、元気づけられる。

力を得てその先に進んで行くと、ロクワグワ・リヤワグワ (rokwa gwa rya wa gwa P. cf. rok C. 話す, rya C. 喋る, -wa C. 植物, gwah C. 素焼きのツボ) という小さなツボがある。これは治療儀礼で、パンデ (シャーマン) がラン (悪霊) たちと戦いを繰り広げるときに人びとのサートウックを安全のために入れておく、そのようなツボである。

そこを通過し先に行くと、コクシニャオ・ニヤムシニャオ (koksi nyao nyamsi nyao P. cf. kok.si C. 小さなイチジク *Ficus semicordata* or *curia*, nyam.si C. 大きなイチジク *Ficus roxburghii*) というイチジクの木も見える。これは人を病気にしないので特別な配慮は必要ない。

だが、つぎのブランドウン・コンドウン (branduŋ konduŋ P. cf. bran- C. 切る, duŋ C. 芽, -duŋ C. 首長, kon C. 邪魔をする) という超自然的存在は、人が熱を出す原因になり、さらに人を動けなくするやっかい者である。これに対しては、ジャーのآم (ご飯) や穀物を捧げるから、人を病気にしないよう説得しなければならない。

これを越えると、大地が裂けているのが見える。それを怖れず、奥に入って行くと、いよいよ最も強い力を持つ、シャ克蘭・ブーラン (syaklan bhulan P. cf. syak- C. 生きる, cf. syak.lan C. 女性の悪霊, buh.lənʔ C. 悪い影響を与える) のもとに到着する。カムサイダ (kamʔ C. 下, səy.də C. 者)、マーカット (ma kat P.) などとも言

われるこのアイ（姑）とトオ（舅）は、出自を辿れるような祖先として想像されているわけではなく、神ともランとも言われる存在で「自分たちの民族だけに憑いている」者である。トンコロで捧げられた子ブタと子ヤギの頭は、このシャクラン・ブーランに対して捧げられる。マーパンデは、そうした供物を捧げる見返りに、トンコロを主催している親族の人びとを病気にしないよう言いきかせる。そして、「わかった。もうサートウックを連れて行ったりしない。人を見つめたりしない」という確約を得ると、ようやくその場から離れる。

そこから進んでいくとマンディンシン (*mandiŋ siŋ P.*) という竹が生えている。この竹の葉に虫が付いて葉が黄色く枯れてくると、人びとに熱が出る。マーパンデはマンディンシンに嵐や虫に負けず、しっかり根付いているように言う。

その先にはホライ (*horay P.*) という巨大な泉がある。だが、この水を連れてきた人びとに与えてはいけない。それも人の病気の原因になってしまう。

ついで、また木が現れる。サンチャシン (*sanca siŋ P. cf. san.cə C.* 人の命と関わる) という木である。これはマンディンシンとは異なり、普通の木だが、やはりマンディンシンと同じようにこの木が枯れると人は痩せ病気になってしまう。そこで、マーパンデは鳥を呼び葉に付いている虫を食べさせ、木の根元に土を盛り、水をかけてやり、風には強く吹かないように言いきかせる。

さらに下へ向かったマーパンデを待ち受けているのは、ダラン (*dhəran P. cf. dha- C.* 誰かに邪視を向ける, *dhər- C.* 振る、振動させる) という超自然的な存在である。パンデは、ダランの姿を認めると、「動くな」と命じる。ダランが動かなくなることによって、他のランたちも動かなくなる。

その先に行ってみると、あたりが暗くなっている。ここが、チャクニヤム・クイニヤム (*cyak nyam kuy? nyam P. cf. cyak- C.* 暗い, *nyam C.* 太陽, *kuy? C.* 戻る) である。マーパンデは、ここには灯火を持って行く。そして、ここまで降りてきた地下の世界の底に突き当たる。

「チャバネ トイ コ ブイ トイ トイ。クイニソル コ ニヤム ソルトイ (*chabane toy ko buy toy toy, kuyni sor ko nyam sor təy P. cf. sor? C.* ひっくり返る。正面に戻る) : チャバネ (どぶろくの漉し器) の底 (へソ)、大地のへソ。南回帰線から逆さまに、太陽が戻って来たぞ」。こう告げると、マーパンデは、翻って上にある別の世界に向かう。

6-3. 地下の上部世界から地上へ

方向転換して、地下の上部世界へ進んで行くと、穀物の量を計るための容器、マナ (*mənə P., mənā N.* 約0.57Lの容器) とパティ (*pathi P., pāthī N.* 8マナ, 約4.5Lの容器) がある。これは普段使っている真鍮などの金属製のものではなく、石でできている。

そこを難なく通過すると、アイダナ・トダナ (*ay? dana ?to dana P.*) という人間的な形象が、突然マーパンデ (大シャーマン) についてこようとする。マーパンデは棒で追い払って難を逃れる。

そうしているうちに、ライクンマ・ライクンパ (*lay kumma lay kumpa P. cf. lay*

C.よく見る, layk- C. ひょっこり訪ねる, kum- C. 結びつける, -ma C. 女性の祖先霊, -pa C. 男性の祖先霊) の家にたどり着く。マーパンデのリン (太鼓) の母と父である。この義理の両親は、マーパンデに、そして娘のリンに何かあったのか、どこからやって来たのかと心配して訊いてくる。マーパンデが「何でもありません。下の世界から仲間のサートウックを連れて来たのです」と答えと、ライクンマ、ライクンパは安心し、娘であるリンにマーパンデをラン (悪霊) たちからしっかりと守るように言いつける⁵。

ブンシム・ブンシバ (bunsi mu bunsi bæ P. cf. bun.si C. 樹液が血のように赤い木で太鼓の筒の材料になる。Ougeniaの一種, muh C. 配偶者の姉, bæh C. 配偶者の兄) もその近くに住んでいる。リンの兄夫婦であるこの2人のところにも、マーパンデとリンは立ち寄っていく。

そこから、サヤエンドウとナスがある場所リンサイネラン・バンタネラン (riṅsay nelanṅ banta nelanṅ P.)、地下世界の鳥の住む場所ドウルクワネラン・ニャワネラン (druḳwa nelanṅ nyawa nelanṅ P.) をマーパンデは通る。サヤエンドウとナスには、これからも地上の世界で食べることを断り (そうしないとのちに食べたとき痩せて病気になる)、鳥たちは逆に、食べないように気をつける (やはり食べると痩せて病気になる)。

つぎにイモとサトイモのライであるゴイダロ・グダロ (goy dalo gu dalo P. cf. goy? C. イモ, gu C. サトイモ, -dal? C. 祖先, da.lə.lan C. 女性の悪霊) のところを訪ねる。雨季に子供がイモやサトイモを食べると熱が出るのは、これに取り憑かれるためである。

やがて、ブクブクと水タバコをふかす音が聞こえてくる。サガルモム (sagar mom P. cf. sagar N. 天界, sāgar N. 海, 火葬場, swarga N. 天国, mom C. 配偶者の妹, 結婚相手に望ましい女性) がマーパンデを待っていた。ここからは、サガルという世界である。サガルの人間は臭い。男はおまけに喉が腫れている。女もいくら美しくても臭い。昔はエレン (地上) の娘たちは皆サガルに泣き泣き嫁に行っていた。逆にサガルの女たちは、エレンに嫁に来ていた。ある山にそのサガルに通じる道があった。ある日、ある男がそこを通りがかったとき、ちょっと小便をしているうちに、持ってきたニワトリが泣きながらその道に逃げ込んでしまった。それ以来、その道は塞がってしまい、お互いに結婚することはなくなった。

今でもときどき、女性が井戸に行ったとき、お腹にサガルの子供を宿すことがある。その女性の子供は生まれてくるとサガルの人のように喉が腫れている。サガルの娘とエレンの男のあいだに生まれた子供の喉は腫れず、エレンの人のようになる。普段もエレンの人たちのサートウックはサガルまで行っているし、サガルのパンデはハチの姿でエレンにやって来る。逆にエレンのパンデたちのサートウックは、治療儀礼のときにハチの姿でサガルまで行く。

そんなサガルの世界の娘、サガルモムが「あなたが好きです、煙草を一服して行きませんか」とマーパンデに言い寄ってくる。マーパンデは「臭くて嫌だ」と言って、その場を離れる。

サガルモムの誘惑から逃れてきたマーパンデは、ニトゥン・ボウリ (nitun bhouri P.) のところに着く。人が疲れ、筋肉痛になるのは、これのせいである。ここはトウ

モロコシなど穀物のリイが行き着くところであり、ニトゥン・ボウリは穀物の親である。すべての穀物はこの子供ゴラン (golaj P.) で、普段私たちが目にしている穀物ができるのは、ニトゥン・ボウリのお陰である。

さらに人を高熱で唸らせるコライ (khoray P.) にそんなことはしないように、説得を終えると、とうとう、マーパンデは、ソナウアマ (sonau ama P. cf. sonal C. 子宮, ʔa.ma C. 母) のもとに到着する。ソナウアマは、子供をつくり、育てる母で、エレンの子供たちができるのは、このソナウアマが洗濯をして、服を地面に叩きつけるときである。そのたびに、サートウックが生まれ、地上で女性が妊娠する。エレンの赤ん坊たちのお尻が黒いの (蒙古斑) は、「ソナウアマがアムを炊いているとき、赤ん坊が泣きわめくので、腹を立てたソナウアマが炊きたての熱いアムを赤ん坊のお尻に投げつけた。それで、そのあとが黒くなった」。

子供のサートウックをソナウアマがしっかり守っているあいだは、エレンの子供たちも元気でいられる。だが、ソナウアマが子供のサートウックを放りだしたら、エレンの子供たちは死んでしまう。そうならないように、まだ小さな子供を持つ親は、ソナウが子供と暮らす地下に杭を打ったり、墓を掘ったりするのも避ける。また、1人でイモを掘れないくらい小さいうちに子供が死んでしまったら、子供のサートウックは天上の世界には送らない。それは、ソナウアマが一時的に手放してしまった結果だから、またソナウアマが子供を抱きかかえるようになれば、別の赤ん坊として還ってくることになるからである。

マーパンデは、そのソナウアマに会い、小さな子供たちが病気になったり、死んでしまったりすることのないよう、しっかり見ていなくてはならないと言い、その場を立ち去り、地上の世界に向かって戻っていく。

その足にまとわりつき、マーパンデが歩くのを邪魔してくる者が現れる。ラーシアイ・グランシアイ (rahsi ayʔ gransi ayʔ P. cf. graŋ.si C. *Ficus lacor* イチジクの種類。樹液はトリモチになる) である。邪魔するなど叱りつけ、マーパンデは家路に向かう。

しばらく行くと、タクリンバン・モウリンバン (takliŋ baŋ mouliŋ baŋ P. cf. tak- C. 許可する, liŋ C. ~するもの, mu- C. 留まる) という石の戸が閉じているのが見える。マーパンデは、戸を開いて道を空けてくれと頼み、なんとか進んでいく。

そして、最後にナクサマ・パンサマ (nak sama pan sama P. cf. nak.sən.ma C. 土地の神, nak- C. 抱きつく, pan- C. 外に出る) に会う。これにも道を空けてくれと言って進む。ついにタルガム・レットグラム (tal glam ret glam P. 土の硬いところ cf. tal.ge C. 真下, ret C. 土を起こす, glamʔ C. 土を平らにする) に着いた、とパンデは言う。そこが自分たちの家サムキム・ロキム (san kim lo kim P.) がある地上である。

6-4. 旅の行方と眼差し

マーパンデ (大シャーマン) とともに魂を飛翔させ、巡った先々について、ここで振り返ってみる。旅先で出会った様々な存在を見直してみると、その多くが夫婦でマーパンデのアイ (姑)、トオ (舅) だったことに気がつく。そのなかには、マーパン

デの妻の父母や義兄義姉も含まれており、この旅が姻戚を尋ねる旅であったことがわかる。地下世界の存在が「夫婦」ではない場合でも、地名以外は大抵2人そろった姻戚である（アイ2人やトオ2人など）。

このような想像は、どのようにしてなされているのだろうか。例えば、日常生活で木を切り倒すために使う斧がある。その斧に対して「斧はあくまで斧である」といったふうにそのなかの差異を見ようとしなければ、おそらくそうした想像には繋がらない。だが、特定の形象には、その奥底を探っていけば差異があると考えれば、そこに何らかの裂け目を見つけることができるはずである。人びとは、その裂け目に夫婦という1対の性差を重ねることで、それを自らの姻戚として想像可能なもの、交渉可能なものとしているように見える（斧の例で言えばトコンアイ・トコントオ）。夫婦になっていない存在があっても、それに対して姻戚の呼称が用いられるために、その配偶者の存在が前提とされ、やはり性差が意識されることになる。

トンコロンの訪問先のひとつニトゥン・ボウリについては、このようなエピソードがある。

村の長老格の男性（パンデではない）と村の外で一緒に歩いているときだった。彼は、畑にたわわに実っているトウモロコシを見ていたかと思うと突然それを指さして筆者にこんなことを訊いてきた。

「これは何だと思う」。「えっ、トウモロコシじゃないんですか」。筆者がそう答えると、「違うんだよ」と笑いながら返された。

彼はこう続けた。「これは私たちにはトウモロコシにしか見えないけど、ニトゥン・ボウリ（nitun bhouri P.）の子供ゴラン（golan P.）なんだ。パンデには見えるんだがね」。「だから、トウモロコシができるようにパンデが毎年ニトゥン・ボウリに儀礼をするんだよ」。

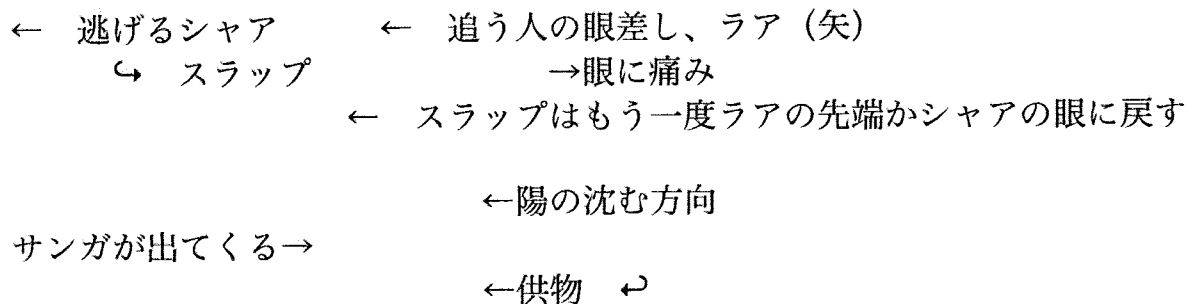
ここから、モノを指さし、差異を差し込むことで日常世界から「切断」し、その「切断」したモノを別の世界（ニトゥン・ボウリの世界）のモノに接続することでも、モノの奥にある世界を見ていくことが可能になっているようにも見える。パンデの旅自体が眼差しの力と、天や大地に対してそのような裂け目を入れたり切断したりする操作に支えられているように思われる。そうして地上（エレン）という表面から、遠い先へ視線は伸びていき、やがてなかへなかへと底まで進み、戻ってくる。

そのような眼差しの進路とは、どのようなものだったのか。マーパンデは、東の空から天に上昇し、西から地下の世界に入っていく。地の底で、太陽が南回帰線に到達し、そこから反転して地上に向かい始める。そして日の出とともに地上の世界に戻ってくる。このような眼差しの進路は、太陽の軌道と重なっている。実際、「マーパンデはトンコロンで太陽の沈む方に行き、太陽の昇るところから戻る」と言われもする⁶。

では、サンガ（祖先霊たち）は、どのような道を通ってやって来るのか。それは、夜、陽が沈むと現れる。太陽の沈んだ先である地下世界から、太陽と逆向きにやって来る。そして、それと相対して闘っていくのに必要とされるのが、月との関連を予感させる神の使いラーディンである。

ラーディンとは別に、サンガの流入を止めるために用いられるのが、供物である。その供物は、前章で見たように、「人が普段食べているものすべて」だった。そして、それらのうちのいくつかは全体の流れを示しつつ、起点と終点を結びつけるような形象を持っていた。尻尾や足をくわえた子ブタや子ヤギの頭、フルイやザルから落ちる穀物を調理しフルイやザルの上に乗せられたアム（ご飯）、生け贅であるオンドリから滴り落ちた血をメンドリの生け贅の口から入れたものなどである。

これらを、サンガが流入してくる方向に投げつけるのには、どのような意味があるのだろうか。ここで、サンガなどの流れを止めることを、その流れを逆転させることと同義と捉えてみる。そして供物の、全体の流れを示しつつ起点と終点を結びつける形象を見直してみると、それは流れを転回させ、逆転させる姿に見える。同様に、第2章で見たスラップ（呪い）も人から逃げ続けるシャア（シカ）の眼差しの流れが逆転して人に向かって反転してきたもの、つまり転回点として捉えることができ、それは人の眼を患わせる力を持っていた。そのような流れの転回を示すものを、流れ出てくる方向へ向かって示し、投げつけることが、流れに抵抗し、止める力を持ち得てもおかしくない。



太陽の動きとサンガの動き、そしてマーパンデや彼に連れて行かれる人びとの魂の旅。すべてが大きな流れのなかにある。その流れを把握して、本来の流れに逆らったり、流れが滞ったりするところには、それが反転し、流れ始めるよう循環する動力を投げ込んでやる。そうして、再び自らが生きる流れに乗り、先へ先へと進んで行く。突き当たるものには、裂け目をつくり、さらに先へと向かう。それがトンコロンから垣間見えるひとつの生のあり方であり、世界をかたちづくる方法である。

このようにトンコロンに見られるマーパンデの眼差しの展開は、人びとを惹きつけ、ある種の快樂を与える。聴衆にとってそれは、とても「サイガルト (say garto P. 聴きたくなる、聴いていて楽しい)」なのである。

その先へ先へと眼差しを進めていく快樂は、人びとが日常的に謳歌する愉しみとも重なり合う。それはチュプ (chyp- C.) という言葉を知ったときに見えてくる。この言葉は、Caughley (2000) にあるように「満足した、状況や場所が楽しい」という意味で使われる。M村の人たちは、筆者に対して頻繁に「この村はチュプかい？」と声を掛けてくれていた。また、バザールや祭に一緒に出掛けたとき、「ここは人が多くてチュプだ」と言うのも何度か耳にしていた。しかし、それ以外に、チュプという言葉聞くのは、ほぼ間違いなく、眺めの良いところであった。

M村の家々はマハーバーラット山脈の南斜面、標高1,000mほどの尾根線の周囲に

点在している。その村のなかで、あるいは他の村に向かう道中で、「ここはチュプだね」とか「チュプでしょ」と言葉を投げかけられるのは、決まって見晴らしのよい場所だった。山の頂上や尾根上で視界が広がったところ、ウシやヤギを雑木林のなかで放牧する最中、木々の合間から遠い山々が見渡せるところ。そのような場所で遠くを眺めているときにチュプなのである。チュプ自体、単に眺めがよいということに留まらない、より広い意味での愉しさを指すにも関わらず、実際チュプと聞くのは、そのような場面がほとんどなのである。

さらに、M村の人びとと一緒にカトマンドゥ観光に行き、どこがチュプだったか訊いてみると、多少の差はあっても、皆トラのいる動物園や飛行機が間近に見える飛行場、パシュパティ (paśupati N.) 寺院なども愉しかったが、スワヤンブー寺院 (swayambhū N. カトマンドゥ市の西の郊外にある巨大な仏塔) がカトマンドゥ全体をよく見渡せて愉しかった、という旨の感想を述べるのだった。もちろん、M村の10人にも満たない人たちの言葉で、M村の全体、あるいは「プラジャ」を名乗る人全体を代表させることはできないだろうが、こうした傾向がM村とその周辺の人びとのあいだで、ある程度共有されていると考えるのは、それほど無理なことではないだろう。

先に述べたように、バザールや祭に出掛け、沢山の人出による賑わいや商店のきらびやかな品々を見るのもチュプである。だが、一日も経つと、一緒に出掛けたうちの何人もが「飽きた」となる⁷。

こうした例を想起すると、チュプとは、つまりこの人びとにとっての愉しみというもの、視線が先へ進んでいくことと強く結びついているのではないか、という疑問が湧き上がってくる。

ここから、山に暮らす人は、見晴らしの良いところから景色を愉しむのが好きだとか、逆に視界を遮られることを好まない、などと一般化することはできないし、ましてや逆に低地や街に暮らす人が視線を広げていくことに快楽を感じない、などと言うこともできない。

しかし、こうした日常的な身体感覚と、トンコロンにおける眼差しなどの儀礼における力のイメージとが重なり合うとき、快楽とともに眼差しを展開し続ける主体イメージが生じる可能性があることを、否定することもまたできないのである。

注

1 トンコロに何度か参加し、長老たちにその内容についての解説を受けて魂の旅の概要を知ったうえで、新たに別のトンコロの際、マーパンデの横に座って彼が唱える文言の内容を周囲の人たちに確認しながら記録した。それを基本に、わかり難かった部分を後日長老たちに解説してもらった。プラジャ語で日常会話はおこなっていた筆者だが、マーパンデが唱える文言は、ほとんど理解できなかった。これは、多くの人たちに助けられ、ようやくかたちをなした極めて不十分な旅の記録である。ただし、トンコロの旅はプラジャの人びと自身も「パンデにしか解らないもの」と言う。

2 祭では、沙羅双樹の木の周囲を取り囲むようにドウシ (dousi P.) と言われる木を刺し、紐でそのまわりを囲み、花を飾り付ける。中心にある沙羅双樹の木の根元には神の宿る石があり、その前で雄ヤギを供犠し、生き血を捧げる。司祭はパンデではなく、呪文もネパール語でおこなわれる。この祭がM村の先代マーパンデが始めたものだというのは、M村の人びとのあいだで共通した認識である。

3 山の名前は、バン・コウラ (baŋ khaula P.)、マラル (mələl P.)、デウラリ (deurali P.)、リイ・リヤム・バタム (ri? lyəm batəm P.)、チュラバン (culabaŋ P.)、スントウン (suntun P.)、レクン (lekhun P.)、パンルン (pan ruŋ)、ポロン (poloŋ P.)などで、これらは日常的な山の呼び名と同じだと言われる。

4 この情景は、ウィン・ライと呼ばれる神話のひとつ「ダルビ・ラジャ」のなかで描かれるものと同じだとM村の古老たちは言うが、筆者はその神話の一部しか蒐集できておらず、まだそれについては確認できていない。

5 パンデがリンに皮を張り直すときにも、リンは夫のパンデが服を棄ててしまったと言いつ、この両親のいる実家に戻ってしまう、とされる。パンデは迎えに行き、良い服を着せてあげようとしただけだと説明する。リンの両親もその通りだと言いつ、リンはパンデと一緒に戻る。

6 Hodgson (1991 (1874)) が当時集めた「チェパン語」のリストに nyamding があり、Caughley (2000) の辞書にも、太陽神 (nyam.din C.) が載っているが、M村の人びとはそのような神はないと言う。

7 その言葉を聞く頃には、筆者自身もバザールの建物や看板に囲まれた視界が広がらない環境のなかで、ある種の気息さや眼の疲れを感じていることがほとんどだった。